

# 小牧ダム

富山県砺波市

1930年、富山県砺波市を流れる庄川水系庄川に建設されたダムである。堤高79.2mは当時として東洋一。水理と土木耐震学の第一人者、物部長穂<sup>ものべながほ</sup>の重力式コンクリートダムの耐震設計理論を適用した最初の事例となった。設計工事監督をアメリカから招聘、世界水準の技術を導入しながら施工には加藤組があたった。

このダムの発祥は実業家・浅野総一郎が、郷里である富山の水利向上とセメント製造に供する電力確保を図るため、1919年に庄川水力電気会社を設立したことに始まった。しかし、経済不況と関東大震災により資金がひっ迫、工事は中断の憂き目を見る。1925年に日本電力（現関西電力）が事業主体となりダム建設は再開されたが、伐採した木を河流に乗せて流送していた木材事業者が猛反発、争議にまで発展した。日本電力は木材を越堤させる施設と、川魚の遡上を助けるエレベーター式魚道の整備を加えた設計変更を行い、6年の歳月を経て完成した。

全幅に17門のラジアルゲートが整列する威容は圧巻。緩やかな曲線を描く美しい堤体は一見アーチ式ダムのようにも見えるが、下流側から見上げるとその重量感が確かに伝わってくる。関西電力(株)庄川水力センターの片岡真二氏に案内していただいた。「もうすぐ100歳になるうとするダムです。ラジアルゲートは取り替えています、堤体は改修していません。コンクリートの健全性は保たれています。年始の能登半島地震でも全く動じることはなかった。黒部ダムにはかなわないかもしれませんが、それに匹敵する価値のあるダムだと自負しています」と言ってほほ笑む。完成からおよそ一世紀。一部が苔むしツタに覆われた堤体が濃い緑、大自然に溶け込むように鎮座する。日本が誇る重力ダムの囁きはかつて「東洋一」と謳われた威厳を今も保ち続けていた。河川ダムとしては全国初となる「登録有形文化財」に登録、土木学会の「選奨土木遺産」にも認定されている。



堤体の右岸側にエレベーター式魚道が設置された。下流側から遡上するアユなどの川魚を籠に誘導し巻き上げる仕組みだったという。設備は撤去されたが構造はそのまま残されている。



監査廊は堤体の上部と下部にある。下部の監査廊には左手の階段から下りる。



提供：関西電力(株)



流木をチェーンコンベアーで積み上げ、堤頂から下流側の貯木場に運搬した。

